旅愁

270
845

始

Tirage

200 exemplaires sur Papier [illegible]

(nos 1 à 200)

500 exemplaires sur Papier "Sakura" [illegible]

(nos 201 à 700)

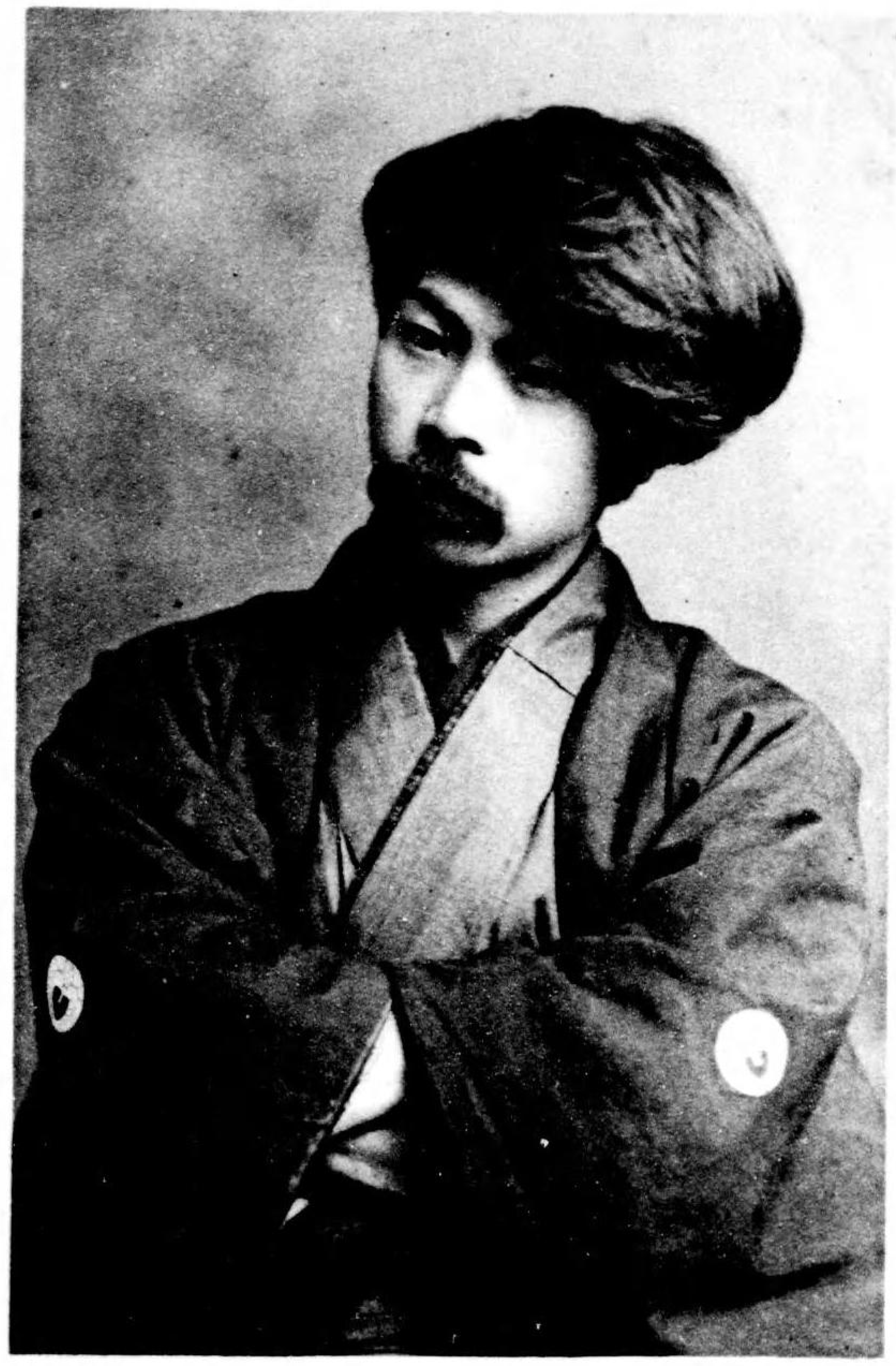
No 213

本書をわが小波、巖谷先生に捧ぐ

旅愁

内藤鋠策

特100
94.
帝國圖書館藏
大正
2. 4. 8
内交



MCMXII XI XXI

叙

本書には、予の過去六年間（MCMVI—MCMXIII）に於ける作二百餘首をさりて收めたり

本書の出版は、予をして幾度か躊躇せしめ、失望せしめ、恐怖せしめつゝ、また、他の慌しき努力によりて何時しかに形成らるゝに至れり

慌しき努力、そは、まことに予のうしろめたき過去の藝術に遠ざからむとして急れる苦闘と、最初計畫されたる、かの、與へられたる事業の終局を見むと冀ふ心より來ける如し

予は、何よりも歩まざるべからず

大正二年三月七日

内藤鋠策

上巻 MCMVI—MCMXI

下巻 MCMXII—MCMXIII

*

装幀 高村光太郎氏

旅愁

上巻

ほとゝぎす、胡桃若葉の岡つづき小
雨に慣れし家のこひしき

人を見ぬ寂しき眸には秋花の白き
かげのみ映りぬるかな

鳩喚べば鳩はやさしくさびしげに
人を見るなり秋風の家

静なるうら枯草のうへふみて行か
ば行くべし、人待ちてゐむ

うつむきてとみに心のおとろへを
おもふ人あり夜の雨ぞする

*

掌（てのひら）の冷からずや、人妻となりたる君
も睡（ね）る春の夜に

*

森の葉に陽(ひ)の射すあはれさ、靜なる
水のほとりのもののあかるさ

物を見る明(あか)き心こともなく青葉の
上にゆきかへりつつ

なきぬるる青葉の心、月光は青葉の
上に白くながれぬ

月光の纖(ほそ)葉(は)よ、密(ひそ)にしのびよる微風
の夜の靜心なし

はるかなるうす藍色の地平よりわ
が母のこゑかよひくるかな

*

灰色の悲哀(かなしみ)、空へ眼もはるに啼つれ
わたる海の上より

芹の花の如くさみしく、明方の海は
樹間(このま)に白みそめけり

哀(かなし)める戀人よ、いましが蒼ざめし涙
の前に葉はそよぐなり

*

心なく女の唇(くち)にささへられ寂しき
音に酸漿(ほほづき)は鳴る

*

いつしかに匂のごとくやはらかに
夕は樹樹を繞りけるかな

わが聰に、林のうへに、水よりも冷く
夜はなびきわたりぬ

□旅愁上卷□

□MCMX□

はるばると母のみとりに急ぐ日の
都さびしく花のちるなり

久にしてあへれば母のいわけなく
物怖ぢたまひあはれになりけり

川ひとすぢたえずながるる故郷(ふるさと)の
薄暮(たそがれ)ばかり寂しきはなし

夜の牕にひそかに物を投げゆきし
あはれの者を悪(にく)まざるべし

ひとすぢの川のみ黒くながれたる
寂しき雪のふるさとを出づ

*

終日(いちにちうち)樹に廣き葉のひるがへりひる
がへり遠き女を戀はしむ

ひとつぶの眞珠の如く、なつかしく
さびしく汝をおもひうかべぬ

おちかかる夜の空氣にいちじるく
今宵は汝のぬれて佇(た)つらむ

我のわれをしみじみ思ふ寂しさに
夕さりくれば戸外(そと)へあゆめり

ピンの眸のしづかにひかる臆際の
この薄暮(たそがれ)の部屋にかへり來ぬ

ほの光るピンのひとつのおきてあ
りはかなく汝のいつかへりけむ

ほととぎす、ある夜汝(いまし)のみつからの
黒髪をきりてはれし悲哀(かなしみ)

いつとなく海酸漿の鳴る音のきこ
ゆれば、わが、うとうとと睡(ね)しかな(病中)

ほろろほろろ雉子啼きてはやうす
あをし戸外は靄のふりいでしかな

薄青き靄の夜明のそことなくかの
小鳥らの死態（しにざま）は見ゆ

露だちてやうやく朝の薄青き竹の
林のしづくの音かな

おともなく鴉は樹より樹へうつる
一羽の鴉さびしかりけり

何よりも榛の梢のあらはなる小鳥
のすがたうら寂しけれ

たそがれとなれば林になきに來る
かの一群の小鳥はなつかし

ふとしてわが肩におきたる友の手
の何故かくは寂しかるらむ

保險會社薄青くかの濠端にけぶり
ゆく時いでて歩みき

たそがれの山路の萱のなびくらむ
この寂しさを足下（あしもと）にする

*

蜩(かなかな)の啼出でてわが書殘(かきさし)のインキの
跡のさびしき夜明
うす曇るランプのほやの哀しけれ
かなかなの啼く夜明の机

やうやく、かなかなの遠くなきかは
しわが眼の前のつめたきガラス戸
やるせなくかなかなの啼交しけり
林の外の赤き夕陽(いりひ)

次第次第果實（くだもの）のごとく腐れゆく肉
體と靈、晝のこほろぎ

待合の晝のさびしく、杯の手にやる
せなきかごのこほろぎ

見てあればかごのこほろぎ、見てあれば杯の酒、やはり寂しき

しんみりと隣家は瓦斯のともりけり杯の酒冷えてさみしき

秋の夜の物静なる東京をぬすびと
のごとしのび出し旅

狂(きちが)ひしにや狂ひしにや、秋の夜の汽
車にさびしく眼を閉づるかな

はるばると汝にあひにゆく如し微行(しのび)の汽車の夜はあけにけり

この我のここの旅館のひとびとに
見知らるることの何(なに)ぞはかなき

この秋の日、はじめて我の魚沼の車
上にあるを誰か知るべき

このすずむし北魚沼のかたすみに
放たれて啼く、思へば哀し

まちわぶる秋の旅館のうすやみに
石油のにほひうすらはかなし

*

枯草のうすらあかりに蜻蛉のとぶ
はさびしや、ひとつの蜻蛉

旅愁 下巻

女よ、いましの神經質はかひがらに
失せぬ眞珠の如し、手をとる

夕ざればいかに寂しくこのさきの
まつかどを汝のいそぎゆくらむ

小禽(ことり)の人にさからふくちばしをを
りふしの汝に見ればさびしき

しばし經て我のうしろに指(ゆびさ)すべき
知人(しりびと)をまたつくらむとする

いつ知らずわが掌(てのひら)におちきたる女
のたましひのあはれさ

草の實のとぶよりもなほはかなげ
に何に狂(きちが)ひてなげくぞや

品物よりも正しくつくられし女の
性(さが)のたふとかりけり

一茎の草花の如きさびしさに汝み
つからも生きむとするらし

つひに慘(みじめ)なる女のために奪(こ)られし
やあぢきなきこの我のねざめかな

このごろの不運はすべて汝より來
ける如し陽(ひ)の膔によるかな

互に組みし指、眞面目なる指、たんぽ
ぽの花瓣の黄なる夕陽

母たちにおくられて門をいてで來
ぬこの病人の交す春の手

思はず手をかはしけり、芹の蔭なる
たまり水つめたこゆる時

見かはして互に咳をいたはればこ
の病人はあはれなりけり

おもひいでてなれ自(みづから)をまもらむと
するはかなさのいかにつづかむ

われゆゑ父のこころに逆ふといひ
いでなばわれいかがなるらむ

坐るか坐らぬに涙ぐみし黒眸（くろめ）、雨さむき朝なりき、女の哀しき黒眸

銀箔のうすらつめたさいま我の唇（くち）にあり、女のさびしき生命

我の有つひとつの製品と見ばいか
に尊からむ、女よ、いま、無言であれ

第一のKISSを我に贈るべく生きて
眞に、今日、汝はここに至りしなり

われ、汝（いまし）のKISSを欲す、何よりもその
無言は愛すべければなり

女よ眼をそらせ、貧しく尖れる神經
こそは忌しきものなれ

汝の、おぼつかなきこの肉體に神は
女といふ信念を授けし

*

□ MCMXII □

まことに女一人のために過ちしか
さびしきはさびしきは青葉の五月
汝になほひとつの秘密をたやすく
おきて別れしを恨とする

自殺を、また汝をおもふことなく夜
は草花の前にうちすはるかな

*

□ MCMXII □

われゆゑの不孝を母のゆるすまで
このごろ汝(なれ)のおとろへしかや

かの草花うらがれていかに殘らむ
かの次の室(ま)に汝は臥すらむ

あひがたき第一日を、かの雨の朝知
りて無言にかへしやりけむ

*

立聞の額を照し、夏の夜の星はまづかに消ぬべかりけり

不意に汝の部屋に躍入り、泣くべきか、笑ふべきか、夏の夜の戸外の立聞

何か非凡なる犯罪を爲し、彼女をひ
きあひに出して會はば會ふべし

*

睡るままにわれの黒眸あさなくな
がれゆきけり、かかる戀しさ

復讐に生き、復讐に死す、まことに我
の生涯の如し

知人(しりびと)はみなかげろふの如く死失せ
よ、冬の林をしみじみとゆく

しづけさは煙の如く樹のかげのち
りしける中のさくらの落葉

舟の如く搖るる體（からだ）をいかにせむ、い
ま死にゆかば、われ、いづちゆくらむ

*

眼の前にせまる哀しきいさくさも
身に添はず室に陽(ひ)を浴びて伏す

小鳥がみな鳩ほどに見ゆ、やや遠き
梢の冬の夕風の中に

五月來る、苦痛に集る若者のうへ、蒼
空は無事に臨むなり

*

午後、あかるき楓林の「とよもと」の座
敷にわれら交す杯

ほのゑひぬ楓林の「とよもと」のとり
わけてこの寂しき薄暮(たそがれ)

彼女(かれ)もまた、この八重子の如く幼く
して賢(さか)しかりけむ、寂しき八重子よ

おさなしく命令(いひつけ)のままにはたらけ
ばこの女らもあはれなるかな

狂人(きちがひ)といふより他(ほか)なし、さもあらば
あれ眼のまへの菜の花

汝は、柱によりてさみしらに、さみし
らにさみしらに、幾日まちけむ

□旅愁下巻□

□MCMXII□

蛙啼く楓林の「とよもと」の座敷にひ
とり若き酒くむ

ひそかに、このノオトの文字に汝の
涙ながしてありしあさはか

今、我何よりもかの小鳥の行爲(おこなひ)をな
つかしくこそうちまもるなれ

小鳥の行爲は眼前(めのまへ)にあらはなり、ひ
とり楓の庭のさびしさ

糸ひきて樹蔭（こかげ）に垂るる虫あり、その
虫の肌蒼きたそがれ

ふともたれしここの柱もうらさび
し、女よ、薄暮の黄なる山吹

夜の海の燐光を空想し、獨、睡眠の前
の脈搏に耳をかす

＊

底黄(ていわう)の薔薇(ばら)を愛する女よ、いま、われ
らの終(をはり)の運命を語るまなざし

眞實さやるせなき自覺のかげより
密(ひそか)に密にのぞける黒眸(くろめ)

かの惡(にく)き口の下より、明日といふ時
間の前にささぐる事實

戀人は死ぬばかりなる愛をねがは
ず底黄の薔薇にうつつをぬかす

月光は牕に來り、若葉にそそぎ、ガラ
ス戸のかげに汝は睡る

うちむかふ胸は海峽、かの眞面目な
る快走船(ヨット)と、蒼空と、赤き太陽

汝の指尖のミシンの上に動くとき
瓦斯の火の前にひらくいちはつ

*

さみしさを兒猫の眸が訴ふる如し
ゆふぐれの部屋にひとり坐れる

兒猫よ、この夕ぐれの部屋に生くる
ものは我と汝のみ、物音もなし

夕ぐれは窓にしのびよる、兒猫は膝
に睡る、われ、愉快なる放浪の追憶に
耽りてあり

平和なる兒猫は膝に睡り、廣き家内に物音もなし、夕ぐれとなる

兒猫よ、いま、何に耳をかす、さかしき
眸は夕ぐれのガラス戸を凝視む、我
の膝よりして

うちまもりうちまもりつついかが
思ふらむ、兒猫よ、この貧しき主人の
夕ぐれの眸を

*

うち見れば森の底よりうすうすと
血を潮し來り明けし夏の夜

かの、オランダのギヤマンのゑづけ
さもて、わが、空想の前に青む夏の夜

聖上、病重らせ給ふ

ひそやかに人のうしろゆ、みちばた
の御容態書をよみてかへりけり

*

聖上、崩御あらせらる

ありとある事業をすてて今日はわ
れ蠶よりさびしく室にこもらむ

*

兒と共に、女よ、身を投ずべくかの山
川は永遠にきよらかならむ

つひにわれかへらざるべし、汝こそ
は私兒生の、眞に私生兒の幸福なれ

従順の母は汝を神の兒の如く思はむ、死にてうまれよ

*

汝の手紙にわけなく涙ながれたり
このままになほ少し睡らむ

*

さる五月すゑ死にゆきしさぞ

かの北魚沼の朝霧にわかれしぬあ
はれうつし世の別なりしかな

□旅愁下卷□

□MCMXII□

まことにわれの心のかなしみは知
りえでとはに死(しに)ゆきしかや

兒と、死ゆきしその母といかがあ
らむ、北魚沼はかねてさみしき

薄なほ若く鈴虫はなくらむ、かの河
原にや死にもゆきけむ

かの夜半の旅館にききし瀬の音を
ききつつ終(つひ)の眼をふたぎけむ

この薄暮の身のやるせなさ、何はあ
れ、死(しに)ゆきし女なればたふとし

樹芽(このめ)の如くすこやかに兒はそだつ
らむ、ひときは世のさびしかりけり

山は、川は、秋立てば北魚沼に汝の墓
は蒼ざめてけむ

微(しの)びける秋の旅館と太陽の落つる
をまちし石の河原と

魚沼の石の河原にわが佇ちてつく
づくききしちちろ、すずむし

夕されば若きすすきのかげに來て
まちわびてきくちちろ、すずむし

啼交すちちろ、すずむし、うち見れば
はやうす青し、山の月出づ

一群の青すすきたそがれゆき、今か
水上(みなかみ)に月出づるなり

川に來てひとりあそべば川の石死
よりなつかし、石ひろはまし

見せばやな川の青石、わが妻は手に
とるか、はや、ぬれてなくらむ

草をふめば足もとのうすら寂し、わ
が失せし女の後かげ、青き月

*

手にされば杯の中、汝の墓も見ゆ、北
魚沼の蒼空も見ゆ
わが友はゆめな知りそね魚沼の霧
のわかれもうつる杯

うら見れば夜半の杯、霧寒みひとり
とひとりわかれする見ゆ

*

欠

□旅愁下巻□